

第38回全国中学生人権作文コンテスト愛知県大会最優秀賞

『僕が欄干になる』

私立滝中学校 二年 長谷川 凌雅

朝七時。

車や通勤の人達が行き交う慌ただしさの中、僕の一日が始まる。足早に駅に向かう途中、必ずすれ違う白杖の男の人がいる。サングラスをかけ、リュックを背負い、姿勢よく歩く姿を見かける度に「おはようございます」と、心の中で話しかけ、白杖の音が聞こえなくなるまで耳を澄ます—いつからかこれが、僕の朝の日課になっていた。雨の日も、雪の日も、姿を見かけない日は一日もなかった。

六月六日、この日は梅雨入りしたこともあり、朝から大雨が降っていた。ずぶ濡れになって駅に着いた僕は、違和感を覚え、すぐにそれが、いつもの男の人とすれ違わなかったことだと気づいた。その時はあまり深く考えなかったが、次の日も、また次の日も、姿を見かけることはなかった。

一週間程経ったある日、僕は、遠くにいつもの男の人の姿を見つけ、思わず駆け寄った。でも、次の瞬間、僕は自分の目を疑った。左の頬には大きな絆創膏、左の手首には包帯が巻かれていたのだ。衝撃を受けた僕は、足を止め、振り返って、その男の人の後ろ姿をずっと見つめていた。その間、僕の頭の中では、「どこかで転んだのか、それとも事故にあったのかなあ。怪我はひどいのかなあ。痛々しいな…」と、色々な感情が渦巻いていた。

その数日後の六月十九日、部活で疲れきってうたた寝をしていた僕は、ニュース速報の音で目が覚めた。それは、横浜市内の駅のホームから視覚障害者の男性が転落し、特急電車にはねられて亡くなったというニュースだった。頭の中で、亡くなった人と、いつもすれ違う白杖の男の人の姿が重なり、心臓が押し潰されそうになった。その時のことを思い出すと、今でも心臓の鼓動が速くなる。平日の夜、人がたくさんいたはずのホームで、なぜ誰も助けてあげられなかったのだろう。一人だったのなら慣れたホームのはずなのに、なぜ転落してしまったのだろう。そのニュースは、僕にとって理解できないことばかりだった。

駅のホーム—それは、僕にとって日々のありふれた光景の一つだ。そして、電車は便利な移動手段でもある。でも、視覚障害者の人達にとって駅のホームは、『欄干のない橋』と呼ばれるほど危険を伴う場所なのだと知った。もし僕が、欄干のない橋を目隠しをして渡るとしたら…想像しただけで足の震えが止まらなくなる。実際に、視覚障害者の約四割もの人が、線路に転落したことがあるという。驚いたのは、その数字だけではない。その大半の人が恐ろしい経験から学び、トラウマを克服して、また同じホームに立っているのだ。苦難を乗り越え、社会に適応して生きているたくましい姿に強く胸を打たれた僕は、視覚障害者の人達が、一体どんな思いで危険なホームを利用するのか、知りたいと思った。

ある日、学生や会社員の人達であふれるラッシュの時間帯に、駅のホームを歩いてみた。それは、僕の想像をはるかに越える、恐怖の連続だった。まず、ホームにたどり着くまでに、かけ降りてくる人や人混みで、真っすぐ階段を上れない。ホームに着いても、自販機やベンチなどの障害物があり、また、歩きスマホに夢中になっている人達に何度もぶつか

りそうになる。最後に、ホームの端に設けられた点字ブロックの上を歩いてみると、列車が通過する度に風圧で身体が吸い込まれそうになった。この視覚障害者の人達のための専用道路とも言える点字ブロックですら、人や荷物で占領されていて真っすぐ歩けないのだ。もし、間違っって一步線路側によけてしまったら…それは、正しく『欄干のない橋』の恐怖そのものだった。

今、視覚障害者の人達などの線路への転落防止のために、ホームと線路の間に、ホームドアが設置されつつある。このホームドアの効果は絶大で、普及とともに転落件数は激減しているようだ。現在は、十万人以上利用者のある駅を優先してすすめられているが、地方や駅員不在のような小さな駅では、予定すらも立っていないのが現状だ。実際、僕の利用する路線でも、ホームドアを設置しているのは、たった二駅しかない。

僕は、自分で経験してみて初めて気づいた。周囲を気にしない歩きスマホや、点字ブロックへの妨害は、視覚障害者の人達を更に危険にさらしている。僕は今まで、白杖の人をジロジロ見ることはいけないと思ってきた。でも、今は違う。偏見や好奇の目で見るのではなく、大切なのは思いやりの心で温かく見守ることだと思う。視覚障害者の人達は、日々、危険と隣り合わせで生きている。無事に終わる一日を心から感謝し、必死で生きているのだと思う。僕は、困っている人や危険にさらされている人を見かけたら、声をかける勇気を持とうと思う。ホームドアが全駅に設置されるまで、僕達周りの人間が欄干となり、尊い命を守っていくのだと、強く心に誓った。